

聖書：マタイ 22：41～46

説教題：ダビデの子、ダビデの主

日時：2020年4月26日（朝拝）

エルサレムに約束のメシヤ、まことの王として入城したイエス様に、これまでユダヤ人のリーダーたちが次々に挑戦しました。最初は祭司長と民の長老たち、次にパリサイ人とヘロデ党の者たち、次にサドカイ人たち、そしてもう一度パリサイ人たち。彼らは何とか言葉の罠にかけようとして難しい質問をもってイエス様との対決を試みました。しかしいずれもイエス様の見事な知恵ある回答の前に完敗しました。それに続く今日の箇所では反対にイエス様がパリサイ人たちに質問します。その結果はと言うと、46節にある通り、だれ一人、一言もイエス様に答えられませんでした。そして「その日から、もうだれも、あえてイエスに質問しようとはしなかった。」と記されています。もうどうやってもイエス様には勝てないことを彼らは認めざるを得なかった。そういう意味で今日の箇所は、しばらく見て来た論争に決着がつくことになったやり取りと言えます。

そのイエス様の問いとはこのようなものでした。42節：「あなたがたはキリストについてどう思いますか。彼はだれの子ですか。」 こう聞かれたら当時の人々の答えは決まっていました。それは「ダビデの子です」というものです。パリサイ人たちもそのように答えました。この「ダビデの子」という表現は、ご存知の通り、ダビデの直接的な子どもという意味ではなく、「ダビデの子孫」という意味であり、特にメシヤ称号としての意味を持つ言葉でした。サムエル記第二7章12～13節：「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」ここにやがてダビデから出る一人の子孫を通して、神はその王国を確立させ、その王座をとこしえまでも堅く立てると約束されました。ダビデの時代に勝るイスラエル王国が、その約束の王を通して実現すると。これは神が将来遣わすまことの王メシヤを指す言葉として人々に理解されて来ました。そしてイエス様がおられた当時、人々はイエス様こそ約束のメシヤと見て、「ダビデの子よ！」と叫んだことが、この福音書にこれまで記されて来ました。最近の箇所でも、例えばエルサレム入城直前にエリコの町を出発した際、二人の盲人がイエス様に向かって「ダビデの子よ、私たちをあわれんでください」と叫びました。またろばの子に乗ってエルサレムに入城した時も、人々は「ホサナ。ダビデの子に。」と賛美しまし

たし、その後、神殿の中でいやしのみわざを行った時も、それを見た子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫びました。

しかしイエス様が真に質問しようとしたことは今のことではありません。問題は其次です。ではダビデがキリストを「主」と呼んだのはなぜなのかということです。イエス様は詩篇 110 篇 1 節を引用して言います。43～44 節：「イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで』』と言っているのですか。」 もともとの詩篇 110 篇の表題に「ダビデによる。賛歌。」と記されていますが、イエス様もこれはダビデによるものと言っています。そして「御霊によってキリストを主と呼び」と言っていますように、これは神の靈感による言葉だと言っています。その詩篇 110 篇 1 節は何と言っているでしょう。ここに「主」という言葉が 2 回出て来ます。そしてその意味をよく考えると、この二つの「主」は、それぞれ別の存在を指していることが分かります。最初に出て来る「主」は「主なる神」を差し、二つ目に出て来る「私の主」は、その後の内容から考えてメシヤ（キリスト）を指しています。そしてイエス様が注目させたいと思っていることは、ダビデがここでキリストを「私の主」と呼んだことです。キリストは「ダビデの子」なのに、どうして「ダビデの主」なのか。普通、父親は自分の子どもを「主」とは呼びません。反対に子どもが父を、あるいはさらにその父祖を「主」と呼んで敬うのが普通です。しかしダビデは自分の後から来る「ダビデの子」を「私の主」と呼んだ。なぜ「ダビデの子」である者が、同時に「ダビデの主」なのか。45 節にあるように、「ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう」という問いです。まるでなぜなぜのような問いです。これは単なるアカデミックな質問、学問的な議論のための質問ではありません。これは後に見ますように、私たちの信仰の根本に関わる質問です。イエス様は決して意地悪い質問をして来たパリサイ人たちに、逆に意地の悪い質問を返して彼らをとっちめようとしたわけではなく、キリストについて人々が正しい理解を持つように、大切な真理を聖書の御言葉からよく考えるように！と導こうとされたのです。

イエス様が言わんとしたことは何でしょうか。イエス様はご自分がダビデの子であることを否定されたわけではありません。先に見たように、メシヤがダビデの子であることは旧約聖書が語って来たことです。またイエス様はその言葉がご自分に向かって語ら

れた時、それを否定せず、むしろ受け入れておられました。またこのマタイの福音書は冒頭の1章1節に「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」と書かれていて、このイエスこそ旧約聖書が指し示して来た「ダビデの子」であると語っています。ですからイエス様はそれを否定しようとなさったわけではありません。ただイエス様が言おうとしていることは、それだけでは足りないということです。それと合わせて聖書が語るもう一つのことも良く考えに入れなければならないということです。それがメシヤ理解、キリスト理解にとって大切であるということです。当時の人々は「ダビデの子」というメシヤ称号にどんなイメージを持っていたのでしょうか。それはあの旧約のダビデ王のように、イスラエルの王国を地上に豊かに打ち立ててくれる王というものでしょう。当時ユダヤ人はローマ帝国の支配下に、すなわち異邦人の支配下にありました。それは彼らにとって大いに不本意な状態でした。その捕らわれの状態からイスラエルを解放し、ユダヤ人の国を回復させ、世界の国々の上に高く上げてくれる王。かつての栄光を取り戻し、さらにまさる状態を作り出してくれる王。そんな王を彼らは待ち望んでいたでしょう。そしてそのために求められるのは軍事的また政治的手腕です。かつてのダビデのように先頭に立って列強の国々と戦う武力的、政治的なメシヤです。イエス様はこの誤ったメシヤ像をここで訂正しようとされたと考えられます。今見て来たメシヤは地上的メシヤです。「ダビデの子」という観点から人間的レベルでのみとらえた考え方はです。それに対してイエス様はメシヤ（キリスト）は確かに「ダビデの子」だが、ダビデはこの方を「私の主」と詩篇110篇で呼んだことに注目させています。これはこのキリストについて何を示しているのでしょうか。それはこの方はダビデ以上の存在であるということです。その方は人間以上の方である。もしその方がただの人間なら、ダビデの「主」にはなりません。ダビデが人間的に先に生きたのであり、後から来る人は彼の「主」にはなりません。しかしダビデがキリストを主と呼んだのは、その方が人間以上の方だからです。肉によれば確かにダビデの後に来ますから、そういう意味では「ダビデの子」ですが、本質的にその方はダビデよりはるか昔からおられる方であり、神的な方であるとダビデは見えていた。神ご自身と見ていたということです。

これはどういうことでしょうか。今、人々の前に立っているイエス様は、キリストであるとするなら、「ダビデの子」として人間的存在であると同時に、ダビデが「主」と呼ぶ神であるということでしょうか。これはキリストについての大きいなるミステリーです。果たして一つの人格において、その方が神であり、同時に人でもあることはあり得るのでしょうか。ここにいるイエス様は人間のように見えるけれども、そして確かに私

たちと同じ人間であるけれども、その方はより本質的に言えば神であるということなどあり得るのでしょうか。しかし聖書はそのように語っているということをイエス様は示しています。これは私たちの頭にうまく収まらないことです。理解しようと努めれば努めるほど、めまいがして来そうです。しかし聖書が語るこの真理を受け止める時、聖書の様々な記事はむしろすっきりと見えて来ます。たとえばイエス様の奇跡の問題もそうです。私たちの頭には信じられないようなことが色々聖書には書かれています。たとえば処女降誕、あるいは色々な癒やしの奇跡、またイエス様が水の上を歩いたり、一言でガリラヤ湖の嵐を静めたこと、5つのパンと2匹の魚から男だけで5千人もの人々を食べさせたこと等々。しかしこの方が神であるとするなら問題は何もなくなります。神にとって不可能なことは一つもありません。また様々な教えもそうです。ここでもイエス様は敵対する者たちが仕掛けて来た議論を次々に論破しました。彼らは太刀打ちできません。ユダヤの一流のエリートたちが相談し、寄ってたかって挑戦しても全く歯が立たない。なぜそうなのでしょう。それはこの方がただの人間ではないことを受け止めるなら至極当然の結果です。これはこの方が人間レベルの方でないことを示しています。前に見た山上の説教もそうです。群衆はその教えに驚きました。イエス様が「律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである」とありました。これもイエス様がただ単にダビデの子であるだけでなく、ダビデが主と呼ぶ方だから、すなわち神そのものなるお方だからということを考えてれば当然のことです。

しかし、なぜこんな面倒なことが必要なのでしょうか。キリストは神であり、また人でもあることがどうして必要なのでしょうか。キリストが神なら、その神としての力をもっと見せつけ、反対者たちを圧倒的な力で成敗すれば良いのではないのでしょうか。そしてその神の力でイスラエルを救い、世界の国々の上に高く上げればそれで良いのではないのでしょうか。しかしこの方法では神は私たちを救うことはできません。神がただ神の力を発揮して悪をさばくという仕方では、誰一人として救われません。なぜなら私たちはみな神の前に罪ある者たちだからです。皆がさばかれて終わりです。ではどうやったら神は罪ある者たちを救うことができるのでしょうか。それは「ダビデの主」が「ダビデの子孫」となり、私たちに代わって罪を背負い、十字架上で裁かれることによってということです。もしこの方が普通の人間なら、たとえその人に罪がなくても、身代わりができるのは一人分だけです。大勢の人を救うことはできません。ではどうやって神は無数の人々を救うことができるのか。残された方法はただ一つ。それは神である方が人となり、多くの人々の罪の罰をご自分の上に引き受けるというものです。神が人となっ

てささげるいのちの犠牲は、無数の人々を救い出す価値と力を持ちます。神と人とは重さが違うからです。そこで神はこのようにして救うメシヤを遣わすことを旧約時代から示して来られました。そしてその御言葉通りに、イエス様がここに来ておられたのです。ですからキリストは決して武力的、政治的メシヤではありません。この方は「ダビデの子」ですが「ダビデの主」なる方です。その方がこれから十字架へ進み、私たちの罪をすべてその身に担ってくださるという方法を通して私たちが救われる世界は初めて開かれて行きます。私たちはキリストを、このような方法で私たちの救いを実現してくださる方として見つめなければならないのです。

そしてこの方は十字架のみわざを成し遂げた後、復活して、この詩篇 110 篇が述べているように、父なる神の右の座へ引き上げられます。「右の座」は、神の代理者が着座する支配の座です。イエス様はやがて天の最も高いところに引き上げられ、そこで神から全権を委ねられた方として、救い主としての力を発揮します。ご自分に信頼する者を自由に罪から救い、自由に恵むことのできる力を発揮します。そしてすべての敵を足の下に従わせて後、すなわち御国を最終的に完成させて後、父なる神にすべてを返されます。キリストは全世界・全宇宙の上に支配権を持ち、その権威を私たちの救いのために発揮してくださるのです。

このイエス様による詩篇 110 篇の引用は使徒たちに深い印象を与えました。この詩篇 110 篇は後の使徒たちの言葉にたくさん出て来ます。たとえばペテロは使徒の働き 2 章のペンテコステの日の説教において、天に上げられたキリストが今この聖霊を注いだと述べた際、この詩篇 110 篇 1 節を引用します。ペテロはこの方が「ダビデの子」であり、「ダビデの主」であることの意味が分かったのです。私たちのところに来られたのは、ダビデが「主」と仰いだ神であること、その方が私たちを救うためのすべてのみわざを成し遂げ、天に昇って、この祝福を注いでくださっていると述べました。またパウロもコリント人への手紙第一 15 章 20～25 節でキリストについてこの詩篇 110 篇を引用しています。またヘブル人への手紙の著者も 1 章 13 節で同じく詩篇 110 篇を引用しています。彼らはみなキリストであるイエス様を理解する上で、これは欠かせない大切な御言葉であることを知る者となったのです。

以上、今日の箇所は一見謎めいた箇所でした。そのため、さっさと次の箇所へ読み飛ばしてしまいそうな箇所でもありました。しかし実は重要な問いを私たちに発している

箇所です。あなたはキリストについてどう思うか。キリストのことをどう考えるか。私たちはこの問いを自分に当てはめることをしないまま、ここを過ぎ去らせてしまっただけではありません。これは 16 章 15 節のピリポ・カイサリアにおけるイエス様の問い、「あなたがたはわたしをだれだと言いますか」という問いとよく似ています。イエス様をどのような方と告白するかは、キリスト教信仰の根本に関わることです。私たちの救いを左右するものです。イエス様は、キリストは「ダビデの子」ではあるが、ただダビデの子であるだけではないこと、「ダビデの主」、神なるお方であるという聖書の証言を良く心に留めるように！と導かれました。今朝私たちが改めて驚きをもって心に留めたいことは、ここにおられたのは神であるということです。神なるお方がご自分を低くして、私たちが今読んでいる箇所までの歩みを地道に続けて来てくださった。そしてここでも反対者たちからの挑戦を次々に受けながら、なおへりくだって歩んでおられた。直ちに彼らを滅ぼさず、なお人々が聖書に基づいてメシヤについての正しい信仰を持つようにと導きながら。そして十字架への道を進もうとしておられた。私たちは改めて、ここにおられたのは人となられた神ご自身であることを感謝をもって告白する者へ導かれたいと思います。そのお方がなおこれから一層ご自分の身をかがめ、辱めの極みにまでご自分を沈めて、私たちの救いを勝ち取ってくださいます。私たちはそのお姿一つ一つを見つめて、心から感謝し、また額づいて、この方への礼拝をささげたいと思います。そしてこの「ダビデの子」「ダビデの主」が勝ち取ってくださる、私たちの罪の赦し、永遠のいのちをいただいて、この方がやがて完成させてくださる救いの世界、最終的な天の御国へ導き入れられる幸いに生かされる者とされて行きたく思います。